

個人の愛着スタイルが排斥からの回復過程に及ぼす影響

伊崎 翼・小川 景子

広島大学大学院総合科学研究科

The Influence of the Attachment Style on Amelioration Process from Social Exclusion

Tsubasa IZAKI and Keiko OGAWA

Graduate School of Integrated Arts and Sciences, Hiroshima University

Abstract: It is known that responses to exclusion are influenced by individual differences. We focused on interpersonal attachment styles of individuals (anxious attachment, avoidant attachment) and investigated subjective responses to exclusion (Need-Threat), as well as attention to signs of exclusion and inclusion (Event-Related Brain Potential: P3b component). Participants played a ball-tossing game consisting of an inclusion session after an exclusion session. Results indicated no significant differences in need-threat scores between attachment styles after exclusion or inclusion sessions. Moreover, P3b amplitude for signs of exclusion (ball-tossing among others) decreased in inclusion sessions in individuals with high anxious attachment compared to those with low anxious attachment. Furthermore, P3b amplitude related to signs of inclusion (receiving balls) in individuals with high avoidant attachment was significantly less in inclusion sessions than in exclusion session.

Keywords: attention, social exclusion, social inclusion, attachment style, ERP

【序論】

人は社会的動物であり、他者との関係性が希薄になることによって身体的・精神的健康が脅かされることが報告されている (Baumeister & Leary, 1995)。他者との関係性を希薄にさせる、または欠落させる現象の一つに社会的排斥がある。社会的排斥とは、「無視されたり、拒絶されたりすること」と定義されており (Williams, Cheung, & Choi, 2000)、所属している社会集団から受け入れられていない状況を示す (MacDonald & Leary, 2005)。先行研究より、排斥状況が慢性化することで、抑うつや無気力などの精神的健康への悪影響や、感情的麻痺を誘発することが報告されている (DeWall & Baumeister, 2006)。排斥経験は我々にとって不適応な状況といえる (MacDonald & Leary, 2005)。

排斥経験と愛着スタイル

他者との関係性に関する個人特性に愛着スタイルがある。愛着スタイルは、独立した2つの下位尺度 (関係不安と親密性回避) から構成される (Mikulincer & Shaver, 2003)。関係不安は、自己に対する考え (自己観) や、他者からの排斥に対して感じる不安の程度を反映する (Mikulincer

& Shaver, 2003)。親密性回避は、他者に対する考え(他者観)や、他者からの受容に対して快く感じていない程度を反映する(Mikulincer & Shaver, 2003)。最適調節仮説(Chester, Pond, Richman, & DeWall, 2012)によると、愛着スタイルは、幼少期に保護者から繰り返し与えられた排斥経験を背景に、この状況に適応するために形成された特性と説明している。

fMRIを用いた先行研究より、愛着スタイルと排斥状況時に賦活が増大する前部帯状回背側部および前島の活動との関連が検討されている。検討の結果、関係不安の高い個人は、低い個人と比べて前部帯状回背側部および前島の賦活が大きく、排斥状況に対する反応が大きいことが示されている(DeWall, Masten, Powell, Combs, Schurtz, & Eisenberger, 2012)。その一方で、親密性回避の高い個人は、低い個人と比べて排斥状況に対する前部帯状回背側部および前島の賦活が小さく、排斥状況に対する反応が小さいことが示されている(DeWall et al., 2012)。

受容経験による回復過程

社会的排斥による不適応な影響から回復する方略として、他者からの受容が有効となる(Tang & Richardson, 2013; Zvolinski, 2014)。先行研究では、排斥経験により生じた欲求脅威(排斥に対するネガティブな主観反応; Williams, 2009)やネガティブ感情の増大は、他者から受け入れられることで回復することが報告されている(Tang & Richardson, 2013)。同様に、排斥経験により低下したポジティブ感情も、他者から受け入れられることで回復することが報告されている(Zvolinski, 2014)。社会的排斥からの回復方略としてはその他に、気晴らしなどが提案されている(Zadro, Boland, & Richardson, 2006)。しかし、希薄化した他者との関係性を改善することで、ネガティブ感情発生の原因に直接対処しているという点で、他者からの受容はより効果的な方略であるといえる。

愛着スタイルによって排斥状況に対する反応には違いがあることから(DeWall et al., 2012)、受容による回復過程にも違いがあると考えられる。し

かし、回復過程と愛着スタイルの関連についてこれまで検討されていない。

排斥経験と認知過程

排斥状況における認知過程を検討する指標に事象関連電位がある。事象関連電位とは、特定の事象に対する一過性の脳電位反応である。特定の刺激に対する注意配分を反映する脳電位にP3b成分がある(Donchin & Coles, 1988)。先行研究より、排斥手がかりに対するP3b振幅の増大はポジティブ感情・統制感の減少に関連することが示されている(Themanson, Khatcherian, Ball, & Rosen, 2013)。同じく、排斥手がかりに対するP3b振幅は、排斥経験後半に減衰する一方で、皺眉筋活動(嫌悪情動を反映)と前頭部における α 帯域の非対称性活動(回避動機を反映)は、後半で増大することが観察されている(Kawamoto, Nittono, & Ura, 2013)。これらの結果は、排斥状況が個人の心理状態に影響を及ぼすことを示す。

本研究の目的と仮説

本研究では、回復過程に及ぼす愛着スタイルの影響を、事象関連電位を用いて検討する。

事象関連電位には、排斥・受容手がかりに対する注意配分(Donchin & Coles, 1988)を反映するP3bを用いた。また、排斥に対するネガティブな主観反応として、欲求脅威(Williams, 2009)を用いた。

本研究における仮説は以下のように設定した。主観指標に関して、排斥経験後は関係不安高群の方が低群よりも欲求脅威が増大し、受容経験の後は両群とも排斥後に比べて欲求脅威が低下する。これに対して親密性回避の高群では、低群よりも受容経験に対して注意が向きにくいと考えられる。そのため、欲求脅威の低下の程度も小さいと予測した。

生理指標に関して、関係不安高群は他者からのネガティブな社会的評価に対して不安を感じる傾向が高いことが報告されている(Mikulincer & Shaver, 2003)。この知見より、関係不安高群は低群と比べ、受容経験時において、他者からの排斥を予期させる排斥手がかりに対して、注意配分が

大きい (P3b振幅の増大) と予測した。これに対して親密性回避高群は、他者との関係の価値を低く評価する傾向がある (Mikulincer & Shaver, 2003)。そのため、排斥後の受容経験で他者から受け入れられること (受容手がかり) に対して、低群よりも注意配分が小さい (P3b振幅の減衰) と予測した。

【方法】

実験参加者

心身ともに健康な大学生16名 (女性9名, 男性7名, $M_{age} = 22.25 \pm 2.41$) が参加した。参加者には、事前に実験に関する説明を行い、文書による実験参加への同意を得た。また本研究は、広島大学大学院総合科学研究科倫理委員会の承諾を得て実施した (承認番号 26-22)。

実験課題および手続き

社会的排斥操作には、コンピュータ上でのキャッチボールゲームである、サイバーボール課題 (Williams et al., 2000) を、事象関連電位測定用に一部修正・簡略化したものを使用した (Figure 1)。1セッションは全80投球からなり、セッション時間は約10分間であった。排斥セッションは、最初の30投球の間は参加者に対して他のプレイヤーと同程度ボールが投球されたが、その後50投球の間は1投球も参加者には投球されないように設定した。一方で受容セッションは、参加者は全80投球のうちの3分の1にあたる約27球が投球されるよう設定した。

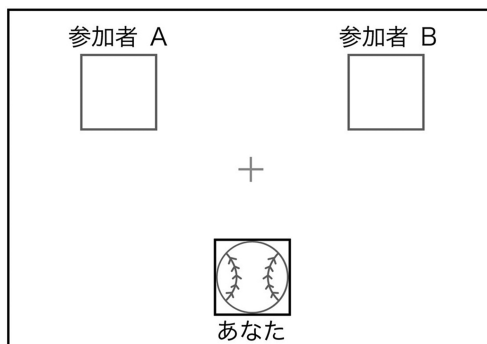


Figure 1. 事象関連電位測定用に一部修正・簡略化したサイバーボール課題 (Williams et al., 2000)

本実験は、排斥セッションと受容セッションからなり、排斥セッションの後受容セッションを行った。参加者には、先行研究 (Eisenberger, Lieberman, & Williams, 2003) を参考に、他者や行動のイメージ能力訓練のためのコンピュータゲームの有効性について調べる研究であり、他の実験室で課題を行っている2名の参加者 (実際にはコンピュータプログラム) と一緒に行うと教示した。実験課題は全体で2セッションからなり、各セッション後には欲求脅威尺度翻訳版 (Kawamoto et al., 2013; Williams, 2009) へ回答を行った。課題の全所要時間は、約30分間であった。全ての手続き終了後、参加者はディブリーフィングを受け、他のプレイヤーが実際にはプログラムであったことや、実験の本当の目的についての説明を受けた。

生理指標の記録と事象関連電位の算出

脳波、眼電図はデジタル脳波計 (Polymate AP1000) を用いて記録した。脳波は拡張10-20%法に基づき、頭皮上8部位 (Fpz, Fz, FCz, Cz, CPz, Pz, POz, Oz) と右耳朧 (A2) より、左耳朧 (A1) を基準として単極導出し、分析時に両耳朧で再基準化した。眼電図は、左右眼角外より水平眼球運動を、左眼窩上下より垂直眼球運動をそれぞれ双極導出した。ボディアースは額に装着し、電極はAg/AgCl電極を用いた。脳波及び眼電図ともに、記録時の時定数は5秒、ハイカットフィルタは30Hz、サンプリング周波数は500Hzとした。

脳波の解析は、Brain Vision Analyzer (Brain Product製) により行い、30Hzのハイカットフィルタをかけた。事象関連電位 (P3b) はボールの移動時点 (四角と四角の間にボールが呈示された時点) をトリガーとして算出した。参加者に対してボールが投球された場合 (参加者への投球) を受容手がかり、コンピュータプレイヤー間でボールが行き来している場合 (他者間での投球) を排斥手がかりとして設定した (Themanson et al., 2013)。ボールの移動時点を基準として、頭頂部優勢に250-400msの区間で最大振幅を示す陽性電位をP3bとして同定した。ベースラインはトリガー前300ms区間とした。

愛着スタイルと欲求脅威に関する質問紙

愛着スタイルの測定には、2つの下位尺度(関係不安; 18項目, 親密性回避; 12項目)を含んだ、一般他者版成人愛着スタイル尺度(中尾・加藤, 2004)を用いた。愛着スタイルの測定は、参加者リクルーティング時に行った。回答は、1(全く当てはまらない)から7(非常に当てはまる)の7件法で行われ、得点は合計・平均化された。 α 係数は、関係不安は.73, 親密性回避は.73であった。愛着スタイルに関して、それぞれの中央値(関係不安: $Me = 3.28$, 親密性回避: $Me = 4.17$)によって、高群と低群に分割した(関係不安: 高群9名, 低群7名, 親密性回避: 高群10名, 低群6名)。

排斥セッション及び受容セッション後の主観反応について、排斥に対するネガティブな主観反応である欲求脅威を、欲求脅威尺度翻訳版(Kawamoto et al., 2013; Williams, 2009; 4項目)を用いて測定した。欲求脅威は、人が持つ基本的欲求(所属感, 状態自尊心, 統制感, 存在意義)に対する脅威の程度から構成される(Zadro, Williams, & Richardson, 2004)。回答は、1(全く当てはまらない)から5(非常によく当てはまる)の5件法で行われ、得点は合計・平均化された。

統計分析

分析には、SPSS statistic ver. 22 (IBM社製)を用いた。欲求脅威尺度得点の検討には、セッション(排斥セッション, 受容セッション)×愛着スタイル(高群, 低群)の、反復測定の分散分析を行った。事象関連電位(P3b)振幅の検討は、各愛着スタイル得点との相関係数の算出および、各投球(他者間での投球, 参加者への投球)に対するP3b振幅に対して、セッション×愛着スタイルの反復測定の分散分析を行った。

【結果】

関係不安得点と親密性回避得点について、相関係数を算出した。その結果、両者の間に有意な相関は示されなかった($r = .29, p = .27$)。そのため本研究では、欲求脅威尺度得点及びP3b振幅に対する愛着スタイルの影響を分析する際に、互いの影

響を統制せずに分析を行った。

Table 1に、各セッション後における欲求脅威尺度得点の平均値(標準偏差)を示す。

欲求脅威尺度得点に対する関係不安の影響

欲求脅威尺度得点に関して、セッション(排斥セッション, 受容セッション)×関係不安(高群, 低群)の、反復測定の二要因分散分析を行った。その結果、セッションの有意な主効果が示された($F(1, 14) = 273.73, p < .001, \eta_p^2 = .95$)。この結果より、排斥セッション後(17.38 ± 1.59)と比較して、受容セッション後(8.44 ± 2.13)では、欲求脅威尺度得点は小さいことが示された。関係不安の主効果およびセッションと関係不安の交互作用効果は示されなかった($F_s(1, 14) < 1.74, p_s > .21, \eta_p^2s < .11$)。

欲求脅威尺度得点に対する親密性回避の影響

欲求脅威尺度得点に関して、セッション(排斥セッション, 受容セッション)×親密性回避(高群, 低群)の、反復測定の二要因分散分析を行った。その結果、セッションの有意な主効果が示された($F(1, 14) = 237.26, p < .001, \eta_p^2 = .94$)。この結果より、排斥セッション後(17.38 ± 1.59)と比較して、受容セッション後(8.44 ± 2.13)では、欲求脅威尺度得点は小さいことが示された。親密性回避の主効果およびセッションと親密性回避の交互作用効果は示されなかった($F_s(1, 14) < 0.66, p_s > .43, \eta_p^2s < .05$)。

Table 1. 各セッション後における欲求脅威尺度得点の平均値(標準偏差)

	関係不安		親密性回避	
	低群	高群	低群	高群
排斥セッション	17.14 (1.57)	17.56 (1.67)	17.00 (1.41)	17.60 (1.71)
受容セッション	9.00 (2.16)	8.00 (2.12)	8.00 (1.41)	8.70 (2.50)

Figure 2には、関係不安高群・低群ごとの、各手がかりに対するP3bの各脳部位における波形を示している。

排斥手がかりに対する関係不安の影響

排斥手がかり (他者間での投球) に対するP3b振幅と関係不安得点との相関係数を算出した。その結果、関係不安得点と受容セッションでのP3b振幅との間に、有意傾向の負の相関が示され ($r = -.48, p = .06$)、関係不安得点が高いほど、受容セッションでの排斥手がかりに対するP3b振幅は小さいことが示された。排斥セッションでのP3b振幅と関係不安得点の間には有意な相関は示されなかった ($r = -.26, p = .33$)。

排斥手がかり (他者間での投球) に対するP3b振幅に関して、セッション (排斥セッション, 受容セッション) × 関係不安 (高群, 低群) の、反復測定 の二要因分散分析を行った。その結果、セッションの主効果が示され $\{F(1, 14) = 32.34, p < .001, \eta_p^2 = .70\}$ 、排斥セッション ($5.71 \pm 2.22 \mu V$) と比較して受容セッション ($10.59 \pm 5.19 \mu V$) では、排斥手がかりに対するP3b振幅は大きいことが示された。また、関係不安の主効果が示され $\{F(1, 14) = 15.99, p < .01, \eta_p^2 = .43\}$ 、関係不安低群と比較して高群では、排斥手がかりに対するP3b振幅は小さいことが示された。さらに、セッションと関係不

安の有意傾向の交互作用効果が示された $\{F(1, 14) = 3.65, p = .08, \eta_p^2 = .21; \text{Figure 3}\}$ 。

下位検定の結果、受容セッションにおいて、関係不安低群 ($13.30 \pm 3.38 \mu V$) よりも高群 ($8.48 \pm 3.40 \mu V$) の方が、排斥手がかりに対するP3b振幅は小さいことが示された $\{t(28) = 3.66, p < .01, d = 1.21\}$ 。また関係不安低群において、排斥セッション ($6.50 \pm 1.59 \mu V$) よりも受容セッション ($13.30 \pm 3.38 \mu V$) で、排斥手がかりに対するP3b振幅は大きいことが示された $\{t(14) = -5.07, p < .01, d = -3.48\}$ 。

受容手がかりに対する関係不安の影響

受容手がかり (参加者への投球) に対するP3b振幅と関係不安得点との相関係数を算出した。その結果、排斥セッションでのP3b振幅 ($r = -.07, p = .81$) および受容セッションでのP3b振幅 ($r = .06, p = .83$) とともに、関係不安得点との有意な相関は示されなかった。

受容手がかり (参加者への投球) に対するP3b振幅に関して、セッション (排斥セッション, 受容セッション) × 関係不安 (高群, 低群) の、反復測定

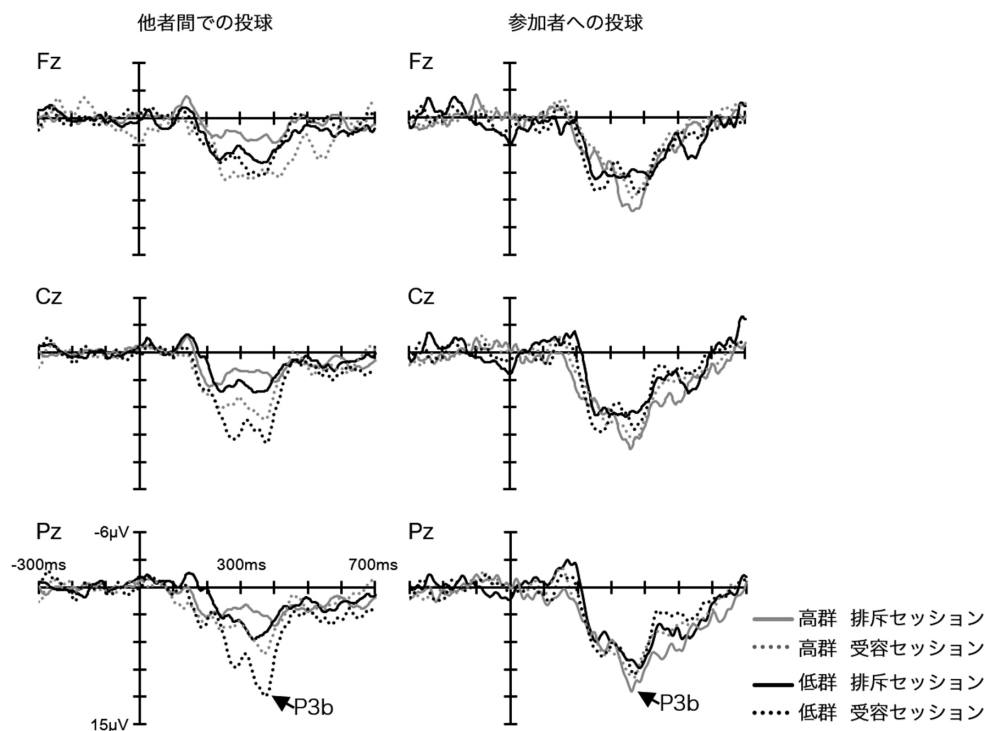


Figure 2. 各手がかりに対するP3bの各部位における波形 (関係不安)

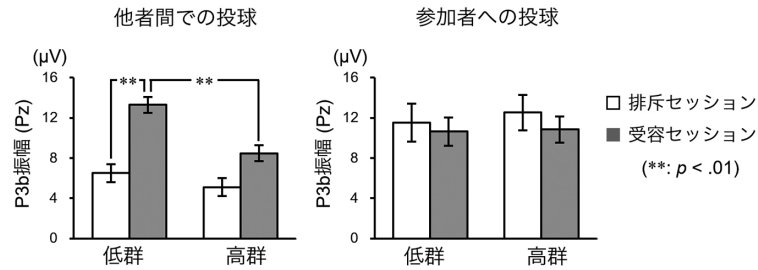


Figure 3. Pzにおける、他人間での投球に対するP3b振幅(左)および参加者への投球に対するP3b振幅(右)の関係不安高低比較

の二要因分散分析を行った。その結果、有意な主効果および交互作用効果は示されなかった { $F_s(1, 13) < 0.69, p_s > .42, \eta_p^2 < .05$; Figure 3}。

Figure 4には、親密性回避高群・低群ごとの、各手がかりに対するP3bの各脳部位における波形を示している。

排斥手がかりに対する親密性回避の影響

排斥手がかり(他人間での投球)に対するP3b振幅と親密性回避得点との相関係数を算出した。その結果、排斥セッションでのP3b振幅($r = -.38, p =$

.15)および受容セッションでのP3b振幅($r = -.30, p = .26$)ともに、親密性回避得点との有意な相関は示されなかった。

排斥手がかり(他人間での投球)に対するP3b振幅に関して、セッション(排斥セッション, 受容セッション)×親密性回避(高群, 低群)の、反復測定二要因分散分析を行った。その結果、セッションの主効果が示され { $F(1, 14) = 23.13, p < .001, \eta_p^2 = .62$; Figure 5}, 排斥セッション ($5.71 \pm 2.22 \mu V$)と比較して受容セッション ($10.59 \pm 5.19 \mu V$)の方が、排斥手がかりに対するP3b振幅は大きいこと

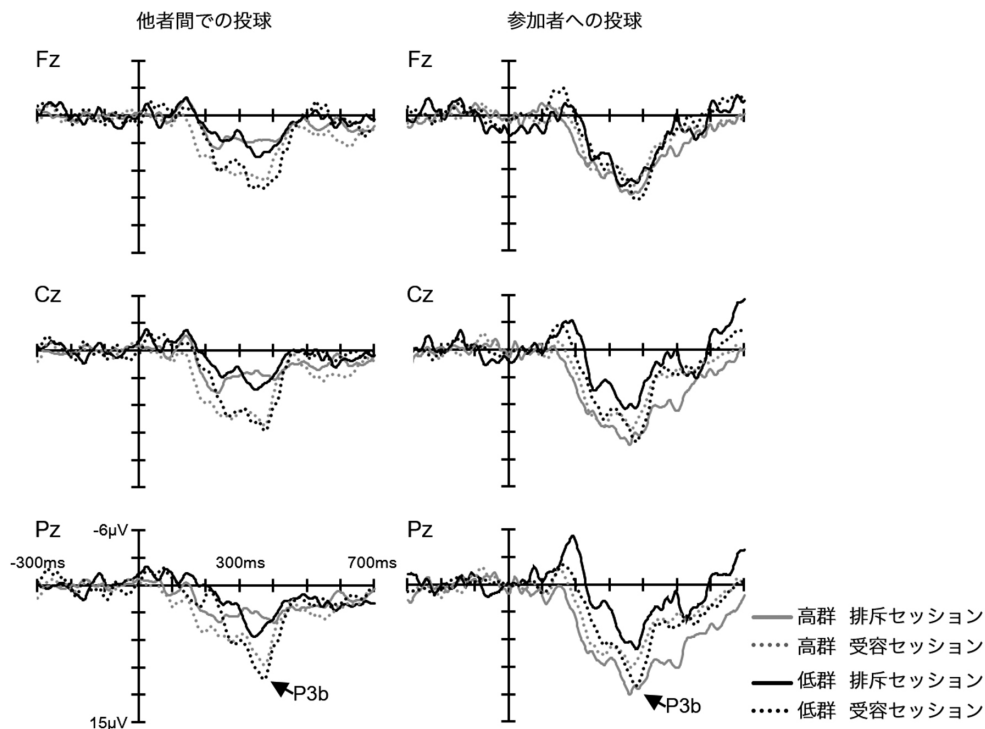


Figure 4. 各手がかりに対するP3bの各部位における波形(親密性回避)

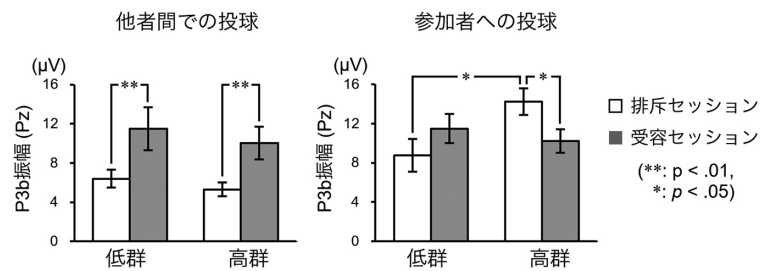


Figure 5. Pzにおける、他者間での投球に対するP3b振幅 (左) および参加者への投球に対するP3b振幅 (右) の親密性回避高低比較

が示された。親密性回避の主効果および、セッションと親密性回避の交互作用効果は示されなかった $\{F_s(1, 14) < .70, p_s > .42, \eta_p^2s < .05\}$ 。

受容手がかりに対する親密性回避の影響

受容手がかり (参加者への投球) に対するP3b振幅と親密性回避得点との相関係数を算出した。その結果、親密性回避得点と排斥セッションでのP3b振幅との間に、有意な正の相関が示され ($r = .58, p < .05$)、親密性回避得点が高いほど、排斥セッションでの受容手がかりに対するP3b振幅は大きいことが示された。受容セッションでのP3b振幅と親密性回避得点との間には、有意な相関は示されなかった ($r = -.29, p = .28$)。

受容手がかり (参加者への投球) に対するP3b振幅に関して、セッション (排斥セッション, 受容セッション) × 親密性回避 (高群, 低群) の、反復測定の二要因分散分析を行った。その結果、セッションと親密性回避の有意な交互作用効果が示された $\{F(1, 14) = 6.91, p < .05, \eta_p^2 = .35; \text{Figure 5}\}$ 。下位検定の結果、排斥セッションにおいて親密性回避低群 ($8.78 \pm 4.48 \mu\text{V}$) よりも高群 ($14.25 \pm 3.79 \mu\text{V}$) の方が、受容手がかりに対するP3b振幅は大きいことが示された $\{t(13) = 2.48, p < .05, d = .96\}$ 。また親密性回避高群において受容セッション ($10.23 \pm 3.82 \mu\text{V}$) よりも排斥セッションの方が、受容手がかりに対するP3b振幅は大きいことが示された $\{t(26) = -2.68, p < .05, d = -2.77\}$ 。セッションおよび親密性回避の主効果は示されなかった $\{F_s(1, 13) < 1.76, p_s > .21, \eta_p^2s < .12\}$ 。

【考察】

本研究では、回復過程に及ぼす愛着スタイルの影響を、排斥・受容手がかりに対するP3b振幅 (注意配分) を用いて検討した。

検討の結果、主観反応である欲求脅威尺度得点は、愛着スタイルに関わらず、受容セッションで排斥セッションよりも有意に低下した。先行研究より、社会的排斥による不適応な影響から回復する方略として、他者から受け入れられることの有効性が報告されている (Tang & Richardson, 2013; Zwolinski, 2014)。本研究においても、排斥後の受容セッションで、愛着スタイルに関わらず回復効果が示された。

回復効果が示された認知的背景について、排斥および受容手がかりに対するP3b振幅の結果をもとに考察する。

関係不安と排斥および受容手がかりに対する注意配分

検討の結果、受容セッションにおいて、排斥手がかり (他者間の投球) に対するP3b振幅は、関係不安得点と負の相関を示し、関係不安高群で低群よりも有意に減衰した。一方、排斥セッションでは、排斥手がかりに対するP3b振幅に関して、関係不安得点との相関、および関係不安の高低群による有意な差は認められなかった。

先行研究から、関係不安の高い個人は、他者からのネガティブな社会的評価に対して不安を感じる傾向が高いことが報告されている (Mikulincer & Shaver, 2003)。さらに、関係不安の高い個人は、低い個人と比べて前部帯状回背側部および前島の

賦活が大きく、排斥状況に対する反応が大きいことが報告されている (DeWall et al., 2012)。これらの知見より、本研究では関係不安高群は低群よりも、排斥手がかりに対する注意配分が増大するだろうと予測した。しかし、予測に反して本研究結果では、関係不安高群の方が低群よりも排斥手がかりに対するP3b振幅が減衰した。

関係不安高群は、排斥に対して大きな反応を示す (DeWall et al., 2012)。この背景として、幼少期に、親からの予測できない突然の排斥に、素早く対処する必要があったことが挙げられている (Chester et al., 2012)。これに対して、本研究の受容セッションでは参加者にも平等に投球が生じたため、素早く排斥状況を検出する必要はなかったと考えられる。そのため、排斥手がかりに対する注意が減衰した可能性がある。

さらに本研究結果より、受容セッション中の受容手がかりに対するP3b振幅に関して、関係不安高群と低群で有意な差は生じなかった。注意の処理資源には一定の量が決まっていることが知られている (Wickens & Gopher, 1977)。これを考慮すると、受容セッションにおいて排斥手がかりに対する注意が減衰したことで、受容手がかりに対する注意配分が増大し、その結果、回復が促進された可能性が考えられる。しかし、本研究では、各投球に対するP3b振幅と、欲求脅威尺度得点(回復の程度)との関連は示されなかった。注意の配分量と回復の程度に関して、今後検討する必要がある。

親密性回避と排斥および受容手がかりに対する注意配分

検討の結果、排斥セッションにおいて、受容手がかり(参加者への投球)に対するP3b振幅は親密性回避得点と正の相関を示し、親密性回避高群で低群よりも有意に増大した。

受容セッションにおける受容手がかりに対するP3b振幅は、親密性回避高低群で有意な差は認められなかった。一方、親密性回避高群では、受容手がかりに対するP3b振幅は、排斥セッションに比べて受容セッションで有意に減衰した。

先行研究より、親密性回避は、他者に対する

考え(他者観)や他者から受け入れられるかどうかに関する考えについて、他者とのつながりを快く感じていない程度を反映する (Mikulincer & Shaver, 2003)。また親密性回避の高い個人は、低い個人と比べて排斥状況に対して前部帯状回背側部および前島の賦活が小さく、排斥状況に対して反応が小さいことが報告されている (DeWall et al., 2012)。これらの知見より、本研究では、親密性回避高群は低群よりも、他者から受け入れられること(受容手がかり)に対する注意配分が減少するだろうと予測した。これに対して本研究では、親密性回避高群でのみ、受容手がかりに対するP3b振幅が、受容セッションで排斥セッションよりも減衰した。これは予測を支持する結果といえる。

さらに本研究では、親密性回避高低群で、受容セッション後の欲求脅威尺度得点に有意な差はなく、両群で回復効果がみられた。この結果より、親密性回避高群で、受容手がかりに対する注意配分が減少した結果、受容経験による欲求脅威の低下(回復)が生じた可能性が考えられる。

排斥・受容手がかりに対する注意配分と回復の程度

本研究結果より、愛着スタイルと排斥および受容手がかりに対する注意配分について、以下の2点が示された。受容セッションにおいて、1) 関係不安高群は、低群よりも排斥手がかりに対する注意配分が減少し、2) 親密性回避高群は、排斥セッションよりも受容手がかりに対する注意配分が減少した。

先行研究より、個人の愛着スタイルの形成には、幼少期における保護者からの繰り返された排斥経験が関与することが報告されている (Chester et al., 2012)。Chester et al. (2012)によると、関係不安は保護者からの気まぐれな排斥経験により形成され、親密性回避は保護者からの慢性的な排斥経験により形成される。そのため、排斥状況に関連する前部帯状回背側部および前島の賦活の程度(排斥状況に対する反応の程度)は愛着スタイルによって異なる (DeWall et al., 2012)。愛着スタイルによる個人の反応(主観、生理)の違いは、過去

の経験に基づいたものであり、環境に適応していく上での最適な仕組み(方略)として形成される(Chester et al., 2012)。Chester et al. (2012)は、これを愛着スタイル形成の最適調節仮説としている。

本研究では、愛着スタイルに関わらず排斥後の受容経験によって回復効果が示された。この結果から、本研究により示された関係不安や親密性回避による排斥・受容手がかりに対する注意配分の違いは、排斥から回復するための適応化(最適調節仮説: Chester et al., 2012)の様子を反映すると考えられる。最適調節仮説に関して、これまで先行研究では排斥状況下での対処方略として検討が行われてきた(Chester et al., 2012)。これに対して、本研究では回復過程においても、最適調節仮説の適応可能性を示した。今後は回復過程(受容状況下)における個人特性と最適調節仮説の関連について検討する。

まとめ

本研究では、回復過程に及ぼす愛着スタイルの影響について、注意配分を反映する脳電位(P3b)を用いて検討した。

検討の結果、受容状況において、関係性不安高群では排斥手がかりに対する注意配分が減少し、親密性回避高群では受容手がかりに対する注意配分が減少した。対して、受容されることによる回復効果は愛着スタイルに関係なく生じた。以上の結果より、愛着スタイルは受容状況における注意配分を調節することで、排斥からの回復を促進する可能性が考えられる。

引用文献

- Baumeister, R. F., & Leary, M. R. (1995). The need to belong: Desire for interpersonal attachments as a fundamental human motivation. *Psychological Bulletin*, **117**, 497-529. doi: 10.1037/0033-2909.117.3.497
- DeWall, C. N., & Baumeister, R. F. (2006). Alone but feeling no pain: Effects of social exclusion on physical pain tolerance and pain threshold, affective forecasting, and interpersonal empathy. *Journal of personality and social psychology*, **91**, 1-15. doi: 10.1037/0022-3514.91.1.1
- DeWall, C. N., Masten, C. L., Powell, C., Combs, D., Schurtz, D. R., & Eisenberger, N. I. (2012). Do neural responses to rejection depend on attachment style? An fMRI study. *Social cognitive and affective neuroscience*, **7**, 184-192. doi: 10.1093/scan/nsq107
- Donchin, E., & Coles, M. G. (1988). Is the P300 component a manifestation of context updating?. *Behavioral and brain sciences*, **11**, 357-374. doi: 10.1017/S0140525X00058027
- Eisenberger, N. I., Lieberman, M. D., & Williams, K. D. (2003). Does rejection hurt? An fMRI study of social exclusion. *Science*, **302**, 290-292. doi: 10.1126/science.1089134
- 伊崎 翼・小川 景子 (2015) 情緒的苦痛からの回復に関する個人特性の影響 生理心理学と精神生理学, **33**, 139
- Kawamoto, T., Nittono, H., & Ura, M. (2013). Cognitive, Affective, and Motivational Changes during Ostracism: An ERP, EMG, and EEG Study Using a Computerized Cyberball Task. *Neuroscience Journal*. Article ID 304674, 11 pages. doi: 10.1155/2013/304674
- MacDonald, G., & Leary, M. R. (2005). Why Does Social Exclusion Hurt? The Relationship Between Social and Physical Pain. *Psychological Bulletin*, **131**, 202-223. doi: 10.1037/0033-2909.131.2.202
- Mikulincer, M., Shaver, P. R., & Pereg, D. (2003). Attachment theory and affect regulation: The dynamics, development, and cognitive consequences of attachment-related strategies. *Motivation and emotion*, **27**, 77-102. doi: 10.1023/A:1024515519160
- Tang, H. H., & Richardson, R. (2013). Reversing the negative psychological sequelae of exclusion: Inclusion is ameliorative but not protective against the aversive consequences of exclusion. *Emotion*, **13**, 139. doi: 10.1037/a0029521
- Themanson, J. R., Khatcherian, S. M., Ball, A. B., & Rosen, P. J. (2013). An event-related examination of neural activity during social interactions. *Social Cognitive and Affective Neuroscience*, **8**, 727-733. doi:10.1093/scan/nss058
- Wickens, C. D., & Gopher, D. (1977). Control theory measures of tracking as indices of attention allocation strategies. *Human Factors*, **19**, 349-365. doi: 10.1177/0

01872087701900404

- Williams, K. D. (2009). Ostracism: A Temporal Need-Threat Model. *Advances in Experimental Social Psychology*, **41**, 275-314. doi: 10.1016/S0065-2601(08)00406-1
- Williams, K. D., Cheung, C. K. T., & Choi, W. (2000). Cyberostracism: Effects of being ignored over the Internet. *Journal of Personality and Social Psychology*, **79**, 748-762. doi: 10.1037/0022-3514.79.5.748
- Zadro, L., Boland, C., & Richardson, R. (2006). How long does it last? The persistence of the effects of ostracism in the socially anxious. *Journal of Experimental Social Psychology*, **42**, 692-697. doi: 10.1016/j.jesp.2005.10.007
- Zadro, L., Williams, K. D., & Richardson, R. (2004). How low can you go? Ostracism by a computer is sufficient to lower self-reported levels of belonging, control, self-esteem, and meaningful existence. *Journal of Experimental Social Psychology*, **40**, 560-567. doi:10.1016/j.jesp.2003.11.006
- Zwolinski, J. (2014). Does inclusion after ostracism influence the persistence of affective distress?. *Group Dynamics: Theory, Research, and Practice*, **18**, 282. doi: 10.1037/gdn0000012